若越郷土研究　五十六巻二号

書評

印牧邦雄著『穴馬村小史』『和泉の自然と歴史』

岩井孝樹

九頭龍川源流の山村「穴馬村」（現大野市和泉地区）は越前、美濃の国境にある。

白山火山帯の山地に連なる標高八〇〇メートルの油坂峠を通じて、かつては、北陸と美濃東海を最短距離で結び、越前の玄関口となる要衝の地であった。

今度、印牧邦雄氏が刊行された「穴馬村小史」と「和泉の自然と歴史」には地域の社会的特徴が失われつつある現代において、今なお、際立った地域の特性を示す歴史の全貌があきらかにされている。

氏は先に、わが国鉱山史の権威、小葉田淳教授監修の「和泉村史」（昭和五十二年）に執筆されているが、この「和泉村」が成立するもととなったのが「穴馬村」であり、その歴史で最も注目されるのが、面谷、中竜などの「鉱山」であることから小葉田教授が監修された。

この度の「穴馬村小史」「和泉の自然と歴史」においても印牧氏が「和泉村史」に執筆されて以来、山深い和泉地区に入り調査研究に精魂を尽された成果が提示されているが、「穴馬村小史」では、全国的ブランドをもつ「大野銅」を産出した面谷銅山について詳細に記述されている。

九頭竜湖の夢の掛橋からさらに面谷橋を渡った山中に、かつては三千人が住み、大野郡内で最初の自家発電の電燈がつき、電話も通じて「穴間銀座」といわれた村が大正十一年閉山のあと全住民が離村となった。

しかし、鉱山史に遺る面谷銅の名は、「穴馬」「和泉」の村名と共に消えることはない。

近年になり、幕末の殖産興業のなかで、山間小藩（大野藩）の驚くべき大業として、藩営商店大野屋、大野丸の交易、それに蘭学の振興が全国的視野のなかで注目されてきたが、その経済的基盤となったのが穴馬郷の鉱山であった。

印牧氏の両著には、この地の貴重な化石を抱蔵する地質から原始時代の遺跡、この地に根づく白山信仰、青葉の笛物語、本願寺直参を誇る穴馬門徒、穴馬紙、さらには小学校の複式教育に至るまで、実地に当たって綿密に考証されている。今日、地域の社会的特徴が喪失していくなかで、その特色が明らかにされた地域史の名著として、ひろくおすすめしたい。

なお、両著のうち「和泉の自然と歴史」を著者が大野市に寄贈された記事が「県民福井」二〇一一年七月二九日号、「福井新聞」八月一日号にそれぞれ掲載された。

『穴馬村小史』
二〇一〇年一〇月　A5判　一三七頁
『和泉の自然と歴史』
二〇一一年七月　A5判　一一九頁

（大野市歴史博物館長）